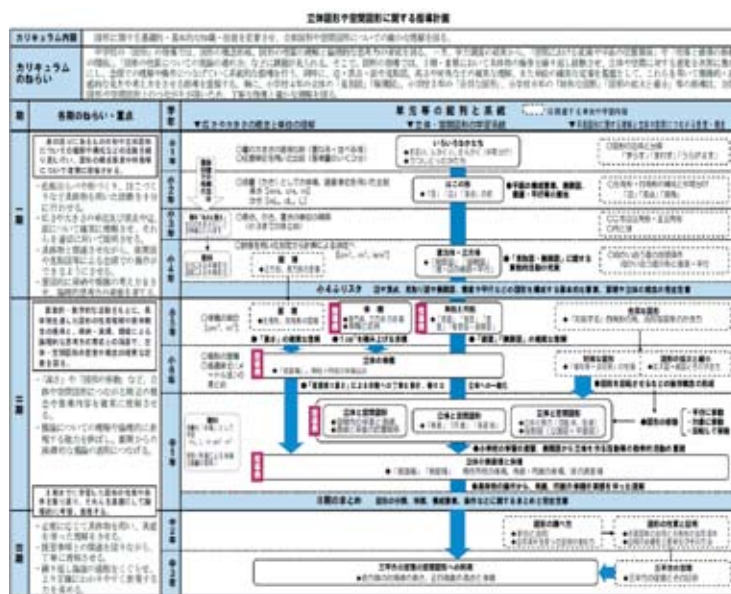


小中一貫教育における学力充実の取組について

京丹後市立峰山中学校（峰山学園峰山中学校）

2年間の研究を終え、平成26年度より峰山中学校区小中一貫教育実施校（愛称：峰山学園）が本格的にスタートした。学園では施設分離型ではあるが、就学前の保育所や幼稚園も含め、共通の教育目標及び目指す子ども像を設定し、10年間を見通した一貫した教育を行おうとしている。

本校では中学校に入学した際に起こる学習・生活スタイルや人間関係の急激な変化に対応できず、学力不振や不登校、非行等の問題事象が増加していた。しかし、小中一貫教育を進める中、保育所、幼稚園、小学校、中学校の緊密な連携を図り、円滑な接続ができるよう研究段階から指導を展開したことによりその課題が少しずつ改善され、学力の面にも反映されるようになった。



▲小中9年間の算数・数学カリキュラム（一部）

全国学力・学習状況調査の結果における特徴

本校3年生は、質問紙で97%の生徒が「学校の規則を守っている」と答えるような真面目で勤勉な生徒が多く、更に小中一貫教育を通して、円滑な接続ができたことにより、落ち着いた学校生活を維持させることができた。そのことにより、学力面で力を伸ばすことができたと思われる。全国学力・学習状況調査の国語A、B共に全国平均を上回っているが、特に言語事項については全国平均を大きく上回っている。また、数学においてもA、B同様にほとんどの観点において全国平均を上回ることができた。

特に「数と式」「数量関係」「資料の活用」「表現・処理」においては大きく全国平均を上回っている。現在の中学3年の京都府学力診断テスト結果を経年比較すると、小学4年時のテストでは、国語、算数共に府平均との差がわずかに高い程度であったが、小学6年時のテストでは、府平均との差が更に広がりポイントを伸ばすことができた。特に算数科においては、学力課題の改善傾向が顕著に現れ、3ポイント以上伸ばした小学校が、6校中4校、更に国語科においても6校中3校が改善を図ることができた。

また、現在の中学2年の学力について、小学4年時に府平均を下回っていたが、小学6年時に全国平均に並び、中学2年時に府平均を数学で大きく上回った。

改善の要因としては、学園内の各校が診断テストの結果や学力向上に効果のあった取組を交流し、それぞれの学校の実践の良さを取り入れると共に、小中学校間の指導方法の一貫性を研究してきたことが大きな要因と考えられる。

全国学力・学習状況調査の結果に寄与したと考えられる取組

授業における取組

全国学力・学習状況調査や京都府学力診断テスト等の質問紙から見ると、本校の生徒は、90%近い生徒が、学習した内容は将来社会で役に立つと感じているものの、自ら主体的に考え積極的に学ぶという点では課題を抱えている。特に家庭学習の習慣が定着していない生徒が多く、「30分未満～全くしていない」という生徒が24%程度いる。そして、中学入学後の学習方法に戸惑い中学1年時の学習が積み上がらないという課題がある。そうした生徒たちを含め、どの生徒も生き生きと主体的に学び、9年間で学力を伸ばすことができるよう取組を進めている。

【具体的な実践内容】

1 授業づくり視点の共通化

小中一貫校として、小中で共通の授業づくりの3つの“指導の視点”（①本時の目標が明確で「わかる」授業、②主体的に活動する場面が設定された授業、③グループで学習する活動を取り入れた授業）を設定し学園全体で実践した。めあてを提示し、達成すべき目標を明らかにしたことや4人グループでの学習形態の学び合いを取り入れることで、生徒自らが主体的に学び、理解しようとする前向きに取り組む様子が見られるようになった。

全国学力・学習状況調査で全国平均を大きく上回った数学科においては、グループ学習で、どのような発問をすれば意欲的に考え、学び合いをすることができるか研究を重ねたり、学び合いを重視することで小学5年から中学1年までの接続期を意識した授業展開をしたりしていくことにより教師自身が実践力を高めることができた。

峰山学園学習指導部・学習指導部 自己肯定感を高め、「わかる」「できる」授業を推進するために小・中学校で共通確認する指導の視点 ～平成26年度版～	
①『本時の目標が明確で、「わかる」授業』を推進	そのために指導者は、 ○授業・生徒へ「めあて」を提示することで本時の学習への意欲を引き出す。 ○授業・生徒が主体的に取り組める学習上の配慮がある授業展開を心がける。 ○中学校での教科別科目を踏まえて、本時の学習内容を意味しきる視しきるを持つ。
②『主体的に活動する場面が設定された授業』を推進	そのために指導者は、 ○授業・生徒が意欲や課題意識を継続させ、自ら解決しようとする意欲を促す。 ○思考をめぐらす場面を積極的に取り入れる。 ○多様な考えを引き出す発問を工夫する。
③『学びを深める多様な学習形態を取り入れた授業』を推進	そのために指導者は、 ○授業・生徒が考えを深めることができるような学習形態を取り入れる。 ○グループやペア等での学習の仕方を選択し、目的的な学習の中で、授業・生徒のコミュニケーション能力を高める。 ○授業・生徒が学習活動の中で学び合えたことを評価する。

▲小中共通の授業づくりの視点

2 表現力育成の強化

数学科ではレポート課題に取り組ませることにより、数学が苦手な生徒も自分なりに努力することができ、言語表現や説明する力、まとめる力を伸ばすことができた。また、ユニバーサルデザインの視点を取り入れ、具体物を提示することや作品作りなど操作を取り入れることでより思考を深められるようにした。

国語科においては「表現力」の弱さがあったため、自分の思いを表現することができるよう「学んだこと作文」を取り入れ指導している。今年度、全国中学生人権作文コンテスト京都大会や小論文グランプリでは優秀な成績を収めることができた。



▲4人グループでの学習の様子

授業以外の取組

1 教え合い学習

本校では、ドリル学習の時間を活用し、学期に一度（2～3週間）教え合い学習を行っている。スタートで診断テストを実施し、学習後のテストで伸び率を競う取組である。どの生徒も最後のテストでは大きくポイントをあげることができている。ペアやグループなどの小集団を設定し、わからない生徒がわかる生徒に教えてもらうことで、“わかる喜び”や“できる楽しさ”また学級全員で取り組むことによる“達成感”を味わうことができている。

2 生徒会主催「楽習の取組」

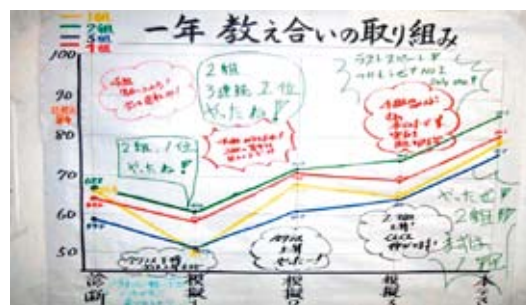
定期テスト前に、「楽習の取組」を実施している。家庭学習で取り組んだノートの提出と学習時間を全校で交流し競い合うものである。こうした全校での取組が学習意欲の喚起や主体的な学びにつながっていると思われる。

3 家庭学習習慣の確立

家庭学習習慣の定着を目指して、学園全体で「家庭学習頑張り週間」を設定し、保護者の協力を得ながら進めている。

4 峰山学園学習指導部会での実践

峰山学園学習指導部会を持ち、通信簿、評価、家庭学習の取組、ノート指導等について交流し、各学校の取組の特徴を明らかにし、統一の視点を協議することができた。また、小小連携も重要視しており、担任会や授業研究を定期的に行い、そこに中学校の教員も参加し、9年間を見通した視点で交流や研究を進めている。



▲教え合い学習の成果を学年で共有